

近代セールス社
創業65周年
記念インタビュー

池井戸潤

氏に聞く



『半沢直樹』や『下町ロケット』など、ビジネス小説で多くの人の心を捉える池井戸潤氏。9月28日には『民王』の待望の続編『民王 シベリアの陰謀』(KADOKAWA)を発売する。近代セールス社からは『金融法務がマンガでラクラクわかる本』(改訂新版)を発売し、後者は20回も重版するなどロングセラーだ。そんな池井戸氏にお話を伺った(以下、敬称略)。

ビジネスの現場を面白おかしく描く

—池井戸さんは次々とヒット小説を世に送り出しています。ご自身の小説が支持される理由はどこにあるとお考えですか。

池井戸 テレビドラマの影響が大き



読者の心を捉えるストーリーの秘訣と65周年へのメッセージ

小説はエンターテインメント 現実と混同せず楽しんでほしい

私が連載していた近代セールスやバンクビジネスもまだまだ面白い企画が眠っていると思います。それを見つけてさらに読者をひきつけてください

いすね。2009年、WOWOWで放映された『空飛ぶタイヤ』の連続ドラマが高く評価され、日本民間放送連盟賞やATP賞テレビグランプリのドラマ部門最優秀賞などを受賞。そこで私の小説は映像と相性が良いのかなと思っていたところに『下町ロケット』の直木賞受賞もあって、TBSから『半沢直樹』のドラマ化の話が来ました。『半沢直樹』は、話の設定からなかなか企画が通らなかったようですが、大学の同窓でもある福澤克雄監督や伊與田英徳プロデューサーが熱心に上層部を説得してくださったようで、13年にドラマ化。それが当たり、小説も多くの人に読んでいただけるようになりました。

—半沢直樹シリーズでは銀行員や金融庁がクローズアップされ、「こんな銀行員や検査官が現実にいるのか」と話題になりましたね。

池井戸 銀行など特定のジャンルを舞台とするビジネス小説は、その業界で実際に働く人たちに受け入れられるケースと、逆に「あり得ない」と拒絶されるケースに分かれます。その点、半沢直樹シリーズは銀行員も喜んで読んでいてという声を多数聞いており、登場人物や人間関係、ストーリーに共感していただけに感じます。

ただ私が書くビジネス小説は基本的には読者に楽しんでいただくエンターテインメントです。現場ではあり得ないことも書くのですが、それがリアルだと感じる読者は必ず一定数います。

半沢直樹シリーズではオネエ言葉を使う金融庁検査官・黒崎駿一が登場します。これは「現実にはこんな検査官はいませんよ」ということを読者に理解していただくため、単行本化するときにあえてオネエ言葉を使うキャラに変えたのですが、それでも「実在する」と思った人はいたようで、ドラマを見た視聴者から金融庁に「お宅の職員はあんな言葉遣いをするのか」といったクレームが入り、金融庁に迷惑をかけたようです(苦笑)。

池井戸潤氏に聞く

小説は面白おかしく書いている部分もありますので、そこはリアルと混同せず、エンターテインメントとして楽しんでください。

多くの人が陰謀論を信じ込む真相とは：

—9月には『民王』の続編『民王 シベリアの陰謀』も発売されます。前作は現職総理大臣とそのバカ息子の心と体が入れ替わるという設定が評判を呼びました。

池井戸 民王を書いたのは09年、当時は麻生太郎氏が総理大臣を務めており国会演説での漢字の読み間違いが話題になりました。私は「なぜ日本のトップが漢字を読めないのか」ずっと疑問に思っていたのですが、あるとき真相に気付いたのです。そうだ、あれはバカ息子と入れ替わっているに違いない——と。これは間違いなく国家機密でメディアも報じないはず。そこで私が代わりに読者に真相を教えてくださいあげようと思い、小説にしました。

—その続編となる『民王 シベリアの陰謀』のポイントを教えてください。

池井戸 今回はウィルス、地球温暖化、そして陰謀論がカギとなってストーリーが進んでいきます。今年1月、トランプ前大統領の多数の支持者が、選挙不正があったとする陰謀論を信じて米国の連邦議会議事堂に乱入、占拠した事件がありました。あのニュースを見て私は「なぜ、あんなに大勢の人が陰謀論を信じるのか」——前作のときと同じようにずっと疑問に思っていたのですが、ついに真相にたどり着いたのです。

日本でも時に陰謀論が蔓延し多くの人が信じ込むことがありますよね。今回の新作には皆さんが必ずや納得いただけるであろう真相を書きましたので、ぜひ手に取ってみてください。

フリー時代を支えてくれた会社

—池井戸さんは弊社の雑誌・近代セールスやバンクビジネスでも長く連載を続けてこられ、融資実務を解説する書籍なども発刊されています。改めて、弊社と



民王 シベリアの陰謀
ドラマ化もされた人気作「民王」の続編。謎のウィルスに総理大臣・武藤泰山と息子の翔が挑む痛快エンターテインメント。
発売日：2021年9月28日（火）予定
定価：1760円（本体1600円＋税）
発行：KADOKAWA

銀行員も柔軟に物事を考えて要領よく対応してほしい

機関向けの書籍も発刊しました。私がフリーになった初期のころを支えていただいた大切な会社です。

—ありがとうございます。そんな池井戸さん自身はどんな銀行員でしたか。

池井戸 私はあまり真面目な銀行員ではなかったですね（笑）。細かい点にはこだわらず、要領よく業務をこなしていました。

私が現役の銀行員だったころ、毎回運転資金を6000万円ほど申し込んできて本部の承認を得た後に、融資実行日となって「すみません、追加で2000万円必要になりました」と平気で言ってくる取引先があったのです。それまでの担当者は稟議をやり直し即日承認をもらっていたようで、引き続きを受けたとき「大変な先だから覚

の関係を教えてください。

池井戸 32歳で銀行を辞めてフリーになったとき、経営者向けに「お金の借り方」を説明した原稿を書いて最初に持ち込んだのが近代セールス社でした。御社を選んだのは、自宅の書棚にたまたま近代セールス社の本があったからです（笑）。

— 応対してくれた当時の役員の方は、突然の原稿持ち込みにもかかわらず丁寧に対応してくださいました。私の原稿は経営者向けの内容だったので、金融機関が読者となる近代セールス社では出版できなかったのですが、代わりにその役員の方は中経出版を紹介してくれました。それが私が最初に出版した『お金を借りる会社の心得 銀行取扱説明書』です。それ以降も御社からは何度も原稿を発注してもらい、金融

悟しておいてね」と言われたことを覚えています（苦笑）。

— それで私はどうしたかというところ、その取引先から6000万円の融資申込みを受けても8000万円、時には1億円の稟議書を最初から書いておいたのです。多めの金額で稟議を書いて少なくて実行するのは問題ありませんからね。結果として素早く融資対応でき、取引先に喜んでもらえました。

銀行員は真面目すぎて6000万円の融資申込みがあれば6000万円の稟議書を必ず書きます。相手に応じてもう少し柔軟に物事を考えて要領よく対応できるとよいのではないのでしょうか。

—最後に弊社・弊社誌65周年へのメッセージをいただけますか。

池井戸 近代セールス社・創業65周年、おめでとうございます。私も連載していた近代セールスやバンクビジネス、そして御社はまだまだもっと面白い企画事業ができると思っています。それを見つけて、未永く継続していただくことを願っています。




池井戸 潤 (いけいど じゅん)

1963年生まれ、岐阜県出身。1998年「果つる底なき」（講談社）で第44回江戸川乱歩賞を受賞し作家デビュー。10年『鉄の骨』（講談社）で第31回吉川英治文学新人賞、翌年「下町ロケット」（小学館）で第145回直木賞を受賞。半沢直樹シリーズは2度テレビドラマ化され、いずれも大ヒット。近代セールス社からも「改訂新版」これだけ覚える融資の基礎知識」などを発刊

プレゼント

池井戸潤氏の「これだけ覚える融資の基礎知識」（近代セールス社刊）のサイン入り本を5名の方にプレゼントします。応募方法は98ページをご覧ください。



（聞き手・構成 本誌・長谷川健太）